（様式２）【ホームページ掲載用】

研究課題（テーマ）	ユマニチュードの実践を通した認知症イメージの変容		
研　究　者	所　属　学　科　等	職	氏　　名
代表者	看護学科	助教	村上章
分担者	看護学科 看護学科	准教授 講師	木谷尚美 青柳寿弥

研究結果の概要

【背景・目的】

急性期病院において看護師は、認知症高齢者（患者）のケアに取り組みにくい要因を抱えている。その要因は、認知症に対するマイナスイメージを払拭できない学習・研修方法や、認知症高齢者とのコミュニケーションスキルの未習得である。

認知症高齢者とのコミュニケーションスキルの１つとしては、ユマニチュードが知られている。ユマニチュードのケア技法は、知覚・感情・言語による包括的なコミュニケーションメソッドであり、これまでコミュニケーションが困難とされた認知症高齢者への有効なコミュニケーションを図れることが期待できる。

したがって、ユマニチュードを介したコミュニケーションによって得られた経験や体験を用いることは、認知症イメージの変容に影響するのではないかと考えられる。しかし、認知症イメージとユマニチュードの関連についての研究はされていない。そこで本研究では、ユマニチュードの実践を通した認知症イメージの変容を明らかにし、認知症イメージとユマニチュード実践の関連を検討することを目的とした。

【方法】

本研究は、インタビューを用いた質的記述的研究である。対象は、富山県内で、ユマニチュードの哲学や基本的な 4 つの技術、5 つのステップについて研修を通して学び、研修内容を用いて認知症看護を実践している看護師の内、研究の同意の得られた者とした。また、本研究は富山県立大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

13 人の看護師にインタビューを終えている。インタビューは 1 回 30～60 分で、1 人 1 回実施した。インタビューで得られたデータから、認知症イメージを示す部分を抜き出し、前後の文脈に留意しながら抜き出した部分の意味を損なわないように要約しコード化した。抽出したコード間を比較し、類似しているものをまとめ、現時点までの分析において、5 人のインタビューデータより 16 個のサブカテゴリー、5 個のカテゴリーを生成している。生成されたカテゴリーから、ユマニチュード実践後の認知症イメージは、ポジティブな内容への変容も認められた。

今後の展開

残り 8 人の分析を進めていくと共に、まだ十分にデータ収集ができていないため、今後も対象者を増やし、データ収集を継続する。本研究の成果については、学会発表および論文投稿を予定している。